

くろ だ とよ た ろう

黒田豊太郎



黒田豊太郎(1861～1918)

出典：『名古屋新聞』明治40年11月23日

名古屋港の生みの親

—第一期工事を設計した明治の官僚—

■「築港と黒田氏、黒田氏と築港」

黒田豊太郎は1861(文久元)年、美濃国(岐阜県)加納に生まれる。1863(明治19)年3月、東京帝国大学工科大学を卒業し、技術官僚(技師)となる。鉄道局(現在のJR)に勤務したのち、内務省土木局に転じて利根川運河の開削や信濃川の改修工事に従事。1897(明治30)年に愛知県庁に入って内務部に新設された熱田築港事業を担当する課長に就任すると、全面的な設計変更を担当するなど、実務上の責任者を務めた。その功績は大きく、開港時の新聞(『新愛知』、明治40年11月23日)にも、「築港と黒田氏、黒田氏と築港と呼はるゝ如く名古屋築港に最も縁故を有し」と紹介されている。

■難産だった築港事業

近世以来の熱田の港(宮の渡し)では大型の洋式船舶(蒸気船)が入港できなかったため、名古屋地方に出入する物資は三重県の四日市港が窓口となり、小舟や鉄道に積み替えて各地に回送されていた。これでは時間的・経済的な損失が大きいとして、熱田の沖合に名古屋港を建設すべしという世

論が名古屋の実業界を中心に盛り上がった。こうした動きを受けて、愛知県知事に赴任してきた時任為基知事は1896(明治29)年度から県の事業(熱田築港事業)として建設に着手したが、風水害に見舞われて築港事業は開始早々行き詰まる。事業主体の愛知県は本件には国家的な重要性があるとして政府に対し協力を要請したが、国から補助金は得られなかった(名古屋港に対する国庫補助金の支出は大正時代半ば以降)。また、巨額の財政負担を嫌った議会(愛知県会)の反対運動にも直面することになった。



名古屋港第一期工事の図面

出典：『名古屋港史』建設編、1990年

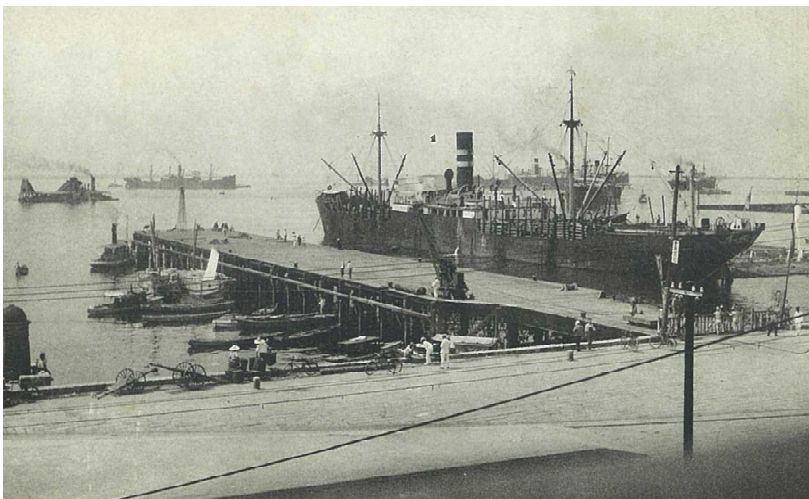
■名古屋港の基礎を築く

1897(明治30)年、時任知事の後任として愛知県に赴任した江木干之知事は、築港事業の根本的な立て直しを決意した。江木は、埋立地の売却に頼った財政計画を止めて県債を発行して賄うように変更するとともに、黒田豊太郎に命じて名古屋港の設計変更を進めた。江木知事の命を受けた黒田は、人造石(たたき)を突堤や埋立護岸に使用したり、最新の機械を導入して浚渫・埋立を行うなど工事方法を改善することにより、工費の削減に努めた。また、東西両突堤の位置を変更して港内の面積を拡大するなどの大幅な設計変更を行った。

黒田の設計した名古屋港の第一期工事計画(1898年)は、ほぼその通りに実施されて開港となり、現在の名古屋港の基礎となっている。

その後、黒田は、1907(明治40)年から1911年まで名古屋築港工事長(築港課長兼務)を務めて退職した。1918(大正7)年に死去した。

(真野素行)



名古屋港開港当初の鉄棧橋

名古屋港管理組合所蔵